

平成 28 年度 卒業式 式辞

人生は、誰も一度きりですから、人は、その日々の暮らしにおいて、より良く生きなければなりません。賢く生きよとは申しませんが、少なくとも本能のままに生きるのではなく、でき得る限り、充実と満足の実感を得た方が良いでしょう。そのような生き方を目指す心掛けを持つということなのです。それが知性というものを持ち得た人類の考えることでありましょう。本日この日、熊本県立大学および本学大学院を旅立つみなさんが、いかなる自己を認識しているか、いかなる信念を持ち得ているか、そのことを問いたいと思います。

人類の知性は、ものごとのすべてを解決する手立てにはなりません。かつて文化勲章を受章した数学者の岡潔は、知性や意志は、「感情」を説得する力がない、人間というものは「感情」が納得しなければ、ほんとうには納得しないという考えを述べています。数学者らしからぬ人間理解の発想と、当時、私は驚いたものです。科学的知性には限界があり、人間の本質には感情の割合が欠かせないと、最近私も思い至っていますが、それでも、あくまで若いみなさんには知性への敬意を持ち続けてほしい。感情に支配されるだけであってはならない。それが学位を得た者のプライドであります。

この世界は、予測困難な時代を迎えています。世のカオスが人類の知性を試しているかのようです。言わずもがなですが、人類が一樣に目指す幸福な社会は、人類自らの力で作り上げていくべきものです。秀れた世界観は、個人の幸福を実現するためのものでもあります。都民ファーストや、アメリカファーストという言葉が賑わいましたが、理念としては理解できるものの、それが近視眼的な物言いでないことを祈るばかりです。自分だけが幸福である人生は存在しないのですから、人ひとり、個人としての生きざまとは別に、地球市民の一員として、いかなる人生観を持つべきか。そのこともまた、今日の日、みなさんに問いたいと思います。

経済的に豊かで活力ある社会は実に望ましいけれども、根元的に、人の世は平穏で安定した社会を理想とします。私たちの毎日は自覚せずとも巡って来ますが、むやみに無駄にしてはならないはずのものです。当たり前のように過ごす日々が、とても大切に何より有難いことに私たちは気付いたはずです。あの日の熊本地震や阿蘇の噴火などによって、不幸な爪痕が今も各所に残っています。しかしながら歴史は、人類が数々の悲惨な過去を克服してきた事実を教えてくれます。私たちのできることは何か。私たちのすべきことは何か。そうした心構えを常に持つてはありませんか。経験から培った知恵を出し合い、後の世のために記憶と記録を留め、いざという時には助け合いの心を持って、それぞれの愛する郷土も人々をも、大切に育み守っていきましょう。

熊本で英語教師として4年3か月を過ごした夏目漱石は、先例を以て未来を計らんとす、愚もまた甚だし、と残しています。同年代で水俣出身の文学者・徳富蘆花は、新しいものは常に謀反である、と述べました。どちらもクリエイション、すなわち創造の価値を説くものです。ただし、決して先例や古いものを軽んずるものではありません。高村光太郎の詩を借

りれば、僕の前に道はない、僕の後ろに道は出来る、すなわち道は、結果として私たちが作るものであります。しかし、もしも良き道を作らん、残さんとするならば、私たちは過去から学ぶべきなのです。過去から学び、良き未来を作る、そのための創造が大切だと2人の文学者が説いた。そのことを忘れてはなりません。

さて、みなさんは今後、それぞれの目指す世界へと羽ばたいていくことでしょうか。みなさんの古里は何処ですか。みなさんにとって古里はいかなる場所ですか。大正時代、金沢の人で、上京したものの志が果たせなかった室生犀星が

ふるさと遠きにありて思ふもの　そして悲しくうたふもの

と詩に詠みました。古里は、離れることで思いが募る場所。そのような精神が、古来より日本文学の中に見られます。人間は、どうしても現実の視野、視界の中で思考し判断することが多くなりますが、確かな理解のためには離れて見つめることも大切なのです。しかしながら、実体験によらずとも、疑似体験でも理解は深められる。頭の中で思いやる能力は、人類に与えられた知性です。イメージーション、すなわち想像力は、私たちの知性の中の重要な位置を占めます。「見る」だけでなく「思う」、しかも「感じて思う」のではなく「考えて思う」。これを、みなさんが社会を生き抜く上での武器にしてほしい。見たものでしか判断できない、触れたものでしか感じられない、そうならないようにしてほしい。私たちの想像力を決して無力化してはいけません。

大学とは学問を通じ、自己を修養し、長きにわたる人生を生き抜くための、意志と覚悟を確認する場でありました。その日々も今日が区切りです。熊本県立大学および本学大学院での日々がみなさんの自己研鑽に役立ったことは疑いようがないでしょう。卒業、修了という節目にあたり、みなさんに自覚してほしいことは、節目とは次の成長に進むプロセスであるということ、すなわち人生は継続的なものであるという真理です。めでたき今日の日を、田嶋徹 熊本県副知事、小早川宗弘 熊本県議会副議長をはじめ、多数のご来賓の方々、および、みなさんの幸せを心から願う方々と共に喜び祝いつつ、これからも明日に向かい、未来を築くべく歩んでいく総勢 503 名のみなさんに次の歌を贈り、本日の式辞とします。

学びたる日々を抱へて天空に昇る星にも竜にもなれや

どうぞ星のように輝く、あるいは竜のように泳ぎ回る、心豊かな人生を送ってください。

平成 29 年 3 月 16 日

熊本県立大学 学長 半藤英明